

## 日本語英語バイリンガル大学生の言語使用状況

### Languages Usage Survey by Japanese-English Bilingual Students

宮原 温子

Atsuko MIYAHARA

#### Abstract

Bilinguals have two alternatives in their language use, however, in one conversation, they do not necessarily select only one language. Moreover, they use different languages with different conversation partners.

In this paper, Japanese-English bilingual university students forming one community were taken as informants, and their language use depending on conversation partners and discussion topics are reported. These informants are all bilingual, university students and around the same age, however their language learning process and language usage within families vary. First, background of informants are described in detail, then their language usage between family members, language usage outside of family, and language usage depending on discussion topics are reported and analyzed. The methodology is of survey, self-reporting by means of interviewing, and analysis of recorded conversations.

It is worthy to analyze the current situation of language usage in a bilingual community, given the increasing status of bilinguals as a minority in the Japanese society that is gradually becoming multilingual.

**キーワード** : バイリンガル、母語、第一言語、会話バラエティ、コードスイッチング

**Key Words** : bilingual, mother language, first language, conversation variety, code switching

## 1 はじめに

日本語のモノリンガル同士の会話であれば、使用言語の選択肢は一つであり、それは日本語である。日本語英語バイリンガル同士では、使用言語に日本語と英語という少なくとも二つの選択肢があるが、実際にはどのような言語使用がみられるのだろうか。

日本語英語バイリンガル大学生のコミュニティーは以前からあったが、主として英語で教育する大学・学部<sup>(1)</sup>の増加に伴って、必然的にバイリンガルのコミュニティーが増大しているといえる。バイリンガル大学生のコミュニティーは留学生だけでなく、海外で生まれ、生まれたときから両言語を習得した日本国籍の若者やいわゆる帰国子女や国内のインターナショナルスクールで教育を受けてきた若者など、多種多様なバックグラウンドを持った若者で構成されている。法務省による国籍留保数統計<sup>(2)</sup>をみると、昭和61年には4,462人であったのが、平成8年には9,881人、平成18年には15,050人と、毎年増加している。外務省による海外在留邦人数調査統計の地域別子女数<sup>(3)</sup>の総数を見ると、昭和61年は39,393人であったのが平成8年は50,080人、平成18年は58,304人となり、増加傾向が見られる。国籍留保数、地域別子女数の増加は、バイリンガルコミュニティーが増大していく可能性を裏付けている。

本稿では、日本語英語バイリンガル大学生10人をインフォーマントとし、まず、多様な背景を持つ日本語英語バイリンガル大学生を紹介し、次に、トピックによる使用言語と話し相手による使用言語の状況を、最後にインフォーマント同士の言語使用状況を考察する。多言語社会になりつつある日本社会において、バイリンガル言語使用の状況を考察することは有意義なことと思われる。

方法はアンケート、インタビューによるインフォーマントの自己申告、会話記録の分析・検討である。アンケート、インタビュー、会話記録は2007年12月から2008年1月にかけて行った。会話は2人、3人あるいは4人で、1回の会話時間約25分のを合計12回テープで記録し、後日文字起こしを行った。

## 2 バイリンガル

### 2. 1 母語・第一言語・第二言語・モノリンガル・バイリンガル

まず、母語、第一言語、第二言語、モノリンガルの意味を確認し、バイリンガルの定義を示す。

母語とは子供が生後の一定期間触れることで、その知識を身につけた言語のことである。第一言語には二つの意味があるが、一つ目は最初に習得された言語、つまり母語のことである。二つ目は日常最もよく使用する言語という意味である。多くは母語がそのまま日常最もよく使用する言語となるが、人によれば環境の変化によって異なることもある。第二言語は一般的に第一言語または母語の次に習う言語のことであり、多くの場合、第一言語の次に頻繁に使用する言語となる。モノリンガルあるいはモノリンガル話者とは一つの言語を使用する人であり、その言語は母語であることが多い。

山本はバイリンガリズムの数多くの定義の中からいくつか紹介して「ペナント型定義」<sup>(4)</sup>を提示している。山本の言うペナント型定義とは、Bloomfieldによる狭義の定義“native-like control of two languages”「二つの言語を母語話者のようにコントロールすること<sup>(5)</sup>」(拙訳)をペナントの先とし、Haugenの広義の定義‘bilingualism is understood .... to begin at the point where the speaker of one language can produce complete meaningful utterances in the other language.’<sup>(6)</sup>『ある言語の話し手がもう一つの言語で完結し、かつ有意味である発話ができる時点をバイリンガルの出発点とする<sup>(7)</sup>』(山本訳)をペナントの底辺としたものである。山本はペナント型定義の中間を用いて「2つの言語を使用する能力を持つこと」としている。バイリンガリズムをこのように定義するに至った過程は納得するところであるが、この山本の定義では、バイリンガルを二つの言語を母語話者並みに使用できる能力を持つことであるという印象を持ちかねない。山本も言っているように母語話者並みの言語能力といっても、実際は個人個人でその能力は違い、“母語話者並み”は明確に言い表せるものではない。また、言語能力は、その言語を学習する過程や生活環境によって変動するものである。例えば、ある専門分野の勉強を始めれば、その分野の語彙を多く持つことになる。また、日本語母語話者が外国生活をしばらく続けていると、一時的に既知の日本語が即座に出力できなくなることがある。本稿では「二つの言語で意味のある、まとまった内容をコミュニケーションできること」とし、その能力を持つ人をバイリンガルとする。「おはようございます」のような挨拶言葉が言えるだけでバイリンガルとはしない。

「英語」の扱いについて確認しておきたい。一言に英語といっても様々な英語がある。世界における英語使用者は約5億800万人<sup>(8)</sup>と言われている。この数字は第一言語・母語として話す人の数だけではなく、第二言語として話す人の数が含まれている。小林<sup>(9)</sup>によるとイギリスでは歴史的・文化的な差で地域方言を生み、地域方言と階層が重なり合って、大きな方言差が存在すると言っている。アメリカ・カナダでは人口の流動性と人種の多様性が相まって地域方言差は小さく、階層による差も小さいと言う。よって、アメリカ・カナダでの英語はイギリスにおける英語よりも均一性があるのだが、いずれにせよ、様々な英語があるということである。インフォーマントの中には、教育機関で英語を学習した人、自身の日本語あるいは英語に十分な能力があると自覚している人もいれば、習得中と思う人、十分であったはずの言語が減退しつつあると感じている人もいる。本稿では、様々な英語、様々な日本語<sup>(10)</sup>を許容する。

## 2. 2 社会的バイリンガリズムと個人的バイリンガリズム

バイリンガルの分類には、一人一人の使用言語の単複に視点を置いたものと社会の使用言語の単複に視点を置いたものがある。

### ① 社会的バイリンガリズム

Appel and Muysken<sup>(11)</sup>によると、社会的バイリンガリズムは理論上、三つに分けられる。一つ目は“In situation I the two languages are spoken by two different groups and each group

is monolingual ; a few bilingual individuals take care of the necessary intergroup communication.” 「モノリンガルのグループが二つ存在し、少数のバイリンガルが二つのグループ間のコミュニケーションを担うという社会」(拙訳)である。二つ目は “In society of type II all people are bilingual.” 「その社会の全ての人々がバイリンガル」(拙訳) というものである。三つ目は “In the form of societal bilingualism one group is monolingual, and the other bilingual.” 「ひとつの社会にバイリンガルのグループとモノリンガルのグループがあるという社会的バイリンガリズム」(拙訳) である。

日本は上記のうち、三つ目のものに近いと言えるだろう。バイリンガルのグループの構成は在日韓国人、アイヌ、ブラジル等からの日系人、留学生、帰国子女、外国人学校の生徒、海外から派遣されてきている人とその家族など様々考えられる。

## ② 個人的バイリンガリズム

個人的バイリンガリズムについては山本<sup>(12)</sup>の説に沿ってまとめていく。

理論上、二つの分け方があるが、一つは、一人のバイリンガルが持つ二つの言語能力のバランスによるものである。平衡(均衡)バイリンガリズムとは両言語の能力を同程度とするものである。両言語が十分な能力があることをさすわけではない。あくまでも能力に差がないということである。これに反して偏りがあるものを偏重バイリンガリズムという。

もう一つは、母語話者の言語能力との比較によるものである。二重バイリンガリズムは両言語がそれぞれの理想的なモノリンガルと同等の能力があるというものである。二重バイリンガルは平衡(均衡)バイリンガルと呼ばれることもある<sup>(13)</sup>。しかし、実際のバイリンガルはその時と場合によってそれぞれの言語を使い分けたり、あるいはコードスイッチング(以降CS)しながらコミュニケーションしている。CSとはバイリンガルがインフォーマルな会話の中で言語を切り替えることである<sup>(14)</sup>。現実では、全ての場面で、一つの言語だけでコミュニケーションしなければならないということはあるのではないだろうか。仮に、限りなく二重バイリンガルに近い人がいたとしても、言語能力は動的なものであり、一人の人間が不変の二重バイリンガルであり続けるということはないだろう。あくまでも理論上の捉え方として認識する必要があると思う。

二重半バイリンガリズムとは両方の言語がそれぞれのモノリンガルの言語能力に達していないことを言う。どちらの言語でも十分にコミュニケーションできない。第一言語習得中に、第二言語を使用する社会に移り住み、第一言語の習得継続も第二言語習得も十分にできなかったときに起こる。その結果、家族間でも十分なコミュニケーションができず、社会的にも不利な立場に置かれることがあり、大変悲しい結果を招く。第一言語(母語)の保持の大切さを考慮して第二言語習得をするよう、周囲の大人や指導者は十分気をつけなければいけないと言われている。

3で詳しく述べるが、インフォーマントのバイリンガル能力について概略を記す。インフォーマントは皆、自らを偏重バイリンガルだと思っている。平衡バイリンガル且つ二重バイリンガルとは思っていない。幸い、二重半バイリンガルはいない。インフォーマントは日本語英語

バイリンガルだが、日本語あるいは英語が第一言語とは限らない。他言語が第一言語で日本語と英語が第二言語、第三言語という人もいる。

### 3 インフォーマントの背景と家族間の使用言語状況

日本語英語バイリンガル大学生10人にインフォーマントとして協力を得ることができた。インフォーマントは都内にある二つの大学に所属する学部生9人と交換留学生1人である。年齢は18才から21才で、女性7人、男性3人である。この二つの大学は総合大学であるが、所属学部では主として英語で授業が行われ、いくつかは日本語で行われる。インフォーマントには、筆者の用いるバイリンガルの定義を平易な言葉で説明して協力を依頼した。

表1にインフォーマントの性別、年齢、身分、国籍、生地、第一言語、第二言語、第三（四）言語をまとめた。インフォーマントの名前はプライバシーを配慮して、アルファベットで記した。表2に家族間での使用言語を表した。アンケートの質問内容はKite<sup>(15)</sup>のものを参考にした。

表1 インフォーマントの基本情報

名前	性	年齢	国籍	身分	生地	第一言語	第二言語	第三・四言語
C	女	21	日本・スイス	学部生	日本	日本語・ドイツ語*1		英語・フランス語
S	女	20	米国	交換留学生	米国	英語	日本語	なし
Y	女	20	日本・米国	学部生	日本	英語*2	日本語	なし
F	女	20	中国	学部生	中国	北京語	日本語	英語・広東語*4
E	女	19	日本・米国	学部生	米国	英語	日本語	スペイン語
K	女	19	日本・米国	学部生	米国	日本語	英語	フランス語
M	女	19	日本	学部生	日本	英語*3	日本語	フランス語
L	男	21	日本・米国	学部生	日本	日本語	英語	なし
H	男	19	日本	学部生	フィリピン	日本語	英語	タガログ語*5
T	男	18	日本・米国	学部生	米国	英語	日本語	スペイン語

表2 家族間での使用言語

<p>父 英 → 母 母 英 ← 父 父 ド ↓ 妹 母 日 ↑ 妹 妹 ド/日 → 父 妹 日/日 ← 母</p>	<p>父 英 → 母 母 英 ← 父 父 英 ↓ 兄 母 英 ↑ 兄 兄 英 → 父 兄 英 ← 母</p>
<p>父 日 → 母 母 日 ← 父 父 英 ↓ 弟 母 日 ↑ 弟 弟 日/英 → 父 弟 日/英 ← 母</p>	<p>父 日/北 → 母 母 日/北 ← 父 父 日/北 ↓ 弟 母 日/北 ↑ 弟 弟 日/北 → 父 弟 日/北 ← 母</p>
<p>父 日 → 母 母 日 ← 父 父 日/英 ↓ 弟 母 日 ↑ 弟 弟 日/英 → 父 弟 日/英 ← 母</p>	<p>父 日 → 母 母 日 ← 父 父 日 ↓ 兄 母 日 ↑ 兄 兄 日 → 父 兄 日 ← 母</p>
<p>父 日 → 母 母 日 ← 父 父 日 ↓ 弟 母 日 ↑ 弟 弟 日 → 父 弟 日 ← 母</p>	<p>父 英 → 母 母 英 ← 父 父 英 ↓ 弟 母 日 ↑ 弟 弟 日/英 → 父 弟 日/英 ← 母</p>
<p>父 日/英 → 母 母 日/英 ← 父 父 日 ↓ 妹 母 日/英 ↑ 妹 妹 日/英 → 父 妹 日/英 ← 母</p>	<p>父 日 → 母 母 日 ← 父 父 日/英 ↓ 姉 母 日 ↑ 姉 姉 日/英 → 父 姉 日/英 ← 母</p>

日：日本語 英：英語 北：北京語 ド：ドイツ語 日/英：日本語と英語 日/ド：日本語とドイツ語

7人のインフォーマントが第三（四）言語を持っている。三つ以上の言語を使用する人はマルチリンガルと呼ぶべきだが、本稿では日本語と英語に焦点を置いて述べるため、バイリンガルと記していく。

インフォーマントCは第一言語を日本語とドイツ語の両方としている。（表1の\*1）インフォーマントCの父親はスイス人（ドイツ語圏出身）で、父親とはお互いにドイツ語で会話をする。母親は日本人で、母親とは日本語で会話をする。また、インフォーマントCには双子の妹がおり、妹とはドイツ語と日本語の両方で会話をする。両親同士は英語である。家族の中に日本語、ドイツ語、英語の三言語がある環境である。ドイツ語と日本語がアイデンティティ<sup>(16)</sup>を表す言語だと答えている。インフォーマントCも妹も日本の幼稚園に1年間通ったが、4才から19才まで横浜市にあるドイツの在外教育機関に通い、Cは高校時代2年間スイス（ドイツ語圏）に留学している。スイス留学の2年間を除く他の期間は両親妹と生活している。日本語は母親と日常生活で話すほかに日本語学習として8、9才のとき塾に通っている。学校では、小学部5年生から6年生にかけて週にコマ、日本語の授業があり、英語は中学部と高校部で週2コマの外国語として勉強している。インフォーマントCの家庭環境、成長過程、学習過程を見ると、第一言語がどちらか一つに決められないということが十分理解できる。

インフォーマントSは米国・ハワイ州で生まれ成長した。18才のとき、ワシントン州にある大学に進学し、3学年目を交換留学生として来日している。国籍は米国だが、インフォーマントSは日系四世である。母親が日系三世で、父親は中国系である。家族（両親、兄）間では全て英語で、日本語を話すことはないそうだが、高校と大学で日本語を外国語として履修している。ハワイには日系人が多いが、インフォーマントSの親友の一人も日系人で、その家族とは親しく付き合いしており、日本語に触れる機会は少なくなかったと思われる。現在は日本人家庭にホームステイし、日常生活では全て日本語を使用し、大学でも日本語の授業を履修している。英語をアイデンティティを表す言語とするが、日本語はアイデンティティを表す言語とはしていない。

インフォーマントYは日本生まれである。父親は日系三世のアメリカ人であり、日本企業で仕事をした経歴もあって、日本語が流暢である。母親は2年前に他界しており、インフォーマントYは看病のために大学入学を一年遅らせている。母親は日本人であり、英語は話せるが、インフォーマントYとはほとんど日本語だった。弟とは英語と日本語を同程度話すと言っている。母親が健在のときは、両親同士は日本語で話したそうである。インフォーマントYは6才でハワイに引っ越したが、アメリカの現地校に通いながら日本語の学習を続けた。現地校の勉強に追いつくために父親が英語を教えてくれたそうである。母親の闘病のために13才で日本に帰ってくるが、インターナショナルスクールに通ったため、英語で勉強する生活が続いた。インフォーマントYにとって、母語は日本語だが、よく使用するという意味での第一言語は英語である。（表1の\*2）よって、第二言語は日本語となる。ハワイに引っ越した頃から第一言語が日本語から英語に変わったものと思われる。日本語も英語もアイデンティティを表す言語

としている。生まれてから現在まで家族と生活している。

インフォーマントFは中国生まれの中国人だが、4才から10才まで両親の大学院入学に伴って来日し、幼稚園、公立小学校、学童保育に通っている。両親は中国人だが、出身地が異なるため、両親にとっての共通語是北京語である。そのため、インフォーマントFはまず、北京語を習得した。その後、来日により、家族間で日本語も使うようになった。現在は、両親是北京語を基盤言語として日本語にCSしながら話し、インフォーマントFも両親と北京語を基盤としながら日本語にCSしながら話す。英語は中国の学校と予備校で学んだ。4才までと、10才から19才まで生活したところが広東語圏の広東省広州市であったため、広東語を自然習得している。(表1の\*4) 広東省では、学校でオフィシャルに勉強するときは北京語だが、友達同士では広東語で話し、教師も親しくなると広東語で話すそうである。インフォーマントFは大学入学で再来日するまでは、北京語が自分のアイデンティティを表す言語と思っていたが、他の北京語を話す留学生(広東語を話せない)に接することで、広東語が自分のアイデンティティを表す言語だと気がついたそうである<sup>(17)</sup>。日本語と英語はアイデンティティを表す言語としていない。19才まで両親と生活し、現在は寮で生活している。兄弟姉妹はいない。

インフォーマントEの両親は日本人であるが、若いときから仕事あるいは勉学のために米国ニューヨーク州で生活していたため、Eはニューヨークで誕生している。インフォーマントEは、父親とは主に日本語だが、英語も部分的に使う。母親とは日本語である。弟とは主として英語だが、日本語も使うと言っている。両親同士は日本語である。インフォーマントEは18才までニューヨークで公教育を受けながら日本語補習校に6才から14才まで通っている。スポーツ、ピアノなど様々な活動をしているが、諸活動での使用言語は全て英語である。インフォーマントEは第一言語を英語とし、第二言語を日本語、第三言語をスペイン語としている。スペイン人のベビーシッターとの接触、16才の時のスペインでの2ヶ月間のホームステイによって、スペイン語が第三言語となっていると言う。日本語も英語もアイデンティティを表す言語としている。18才までは家族と生活し、現在は祖母、弟と生活している。

インフォーマントKは父親の転勤のため、米国、イリノイ州で誕生している。2才から4才までジョージア州、4才から7才までメリーランド州、7才から18才までジョージア州で過ごしている。いずれの場所でもアメリカの公教育を受けながら、7才から17才まで日本語補習校に通っている。日本語補習校と平行して7才から15才まで日本語の通信教育を受けている。アフタースクールの活動は、地域のもので日本語補習校のもの両方に参加しており、使用言語は地域のは英語、日本語補習校のものは日本語である。インフォーマントKの家庭では「家では日本語を使う」という決まりごとがある。兄がいるが、兄とも日本語である。日本語も英語もアイデンティティを表す言語としている。18才まで家族と生活し、現在は一人暮らしである。

インフォーマントMは日本生まれだが、乳児期と12才から14才までを父親の転勤のため米国で生活している。乳児期には米国の保育園に通い、12才から14才までは、現地校に通っている。8ヶ月間ESLのある中学校に通い、家庭では英語のチューターのサポートを受けながら英



語を学習している。公教育のほかに日本語補習校に通っている。小学校時代は日本で過ごしているが、学童保育にも通った。14才で帰国してからはインターナショナルスクールに入り、英語を使用言語として学んでいる。様々な活動は、アメリカにいるときは英語使用のものだけであるが、帰国後は英語使用のもの、日本語使用のもの両方に参加している。小学校時代は日本語使用のものだけである。第一言語については、以前は日本語であったが、現在は英語になったそうである。(表1の\*3) 第三言語はフランス語である。幼児期に東京にあるフランスの在外教育機関に通い、高校、大学で外国語科目としてフランス語を履修している。家族の間では全て日本語である。兄弟姉妹はいない。日本語も英語もアイデンティティを表す言語としている。生まれてから現在まで家族と生活している。

インフォーマントLの父親はアメリカ人で母親は日本人である。Lは日本生まれで19才まで家族と共に日本で生活し、大学入学を一年留保して、米国14州をアルバイトをしながら過ごしてきた。インフォーマントLは3才から11才までは英語を使用言語とする教育機関に通っていたが、11才から16才まで日本の教育機関に移り、16才から19才までインターナショナルスクールに通っている。アフタースクールの活動として、様々なスポーツをしているが、使用言語が英語のものと日本語のもの両方に参加している。第一言語を日本語、第二言語を英語としている。父親とは英語だけで、母親とは日本語だけで話すように、そして、父親にはスラングを使わず丁寧に、母親にはできるだけ敬語を使い、年上の人には必ず敬語を使うように指導されたそうである。インフォーマントLには弟が三人いるが、弟たちとは「混ぜ言葉」<sup>(18)</sup>を使う。両親同士は英語である。日本語も英語もアイデンティティを表す言語としている。

インフォーマントHは、父親は日本人で母親はフィリピン人である。インフォーマントHはフィリピン生まれだが、外交官である父親の転勤で日本、米国、パキスタン、ハンガリーに数年間づつ生活し、現地の公立学校(使用言語は英語)、インターナショナルスクールあるいは日本人学校(全日校)に通っている。日本人学校(全日校)に通っていないときは、日本語補習校に通い、常に日本語の教育を受けている。アフタースクールの活動は日本語使用のものや英語使用のもの両方に参加している。インフォーマントHは第一言語を日本語とし、第二言語を英語としている。父親とは日本語で会話するが、母親とは主に英語だが、日本語も少し使うそうである。母親が実家の家族とタガログ語で話すため、インフォーマントHはタガログ語を話すことはできないが、リスニングは少しできると言っている。(表1の\*5) インフォーマントHには妹がおり、妹とは英語と日本語を同程度使うと言う。両親同士は日本語と英語である。日本語をアイデンティティを表す言語とし、英語はアイデンティティを表す言語としていない。

インフォーマントTはインフォーマントEの弟である。両親についてはインフォーマントEのところでも記したものと同様である。インフォーマントTもニューヨークで生まれ18才までニューヨークで過ごしている。米国の公教育を受けながら6才から18才まで日本語補習校に通っている。姉のインフォーマントEは日本語補習校を14才でやめているが、インフォーマントTは高校時代も続けている。アフタースクールの活動としては現地校のスポーツ活動に参加

しているが、日本語補習校の友人と頻繁に交友したそうである。インフォーマントTは第一言語を英語、第二言語を日本語、第三言語をスペイン語としている。インフォーマントEと同様、幼少時スペイン人のベビーシッターと過ごし、中学校、高校で第一外国語としてスペイン語を履修している。インフォーマントTは父親に日本語だけで話す、父親はインフォーマントTに主として日本語を使うが、幾分英語を使うとしている。母親とはお互いに日本語を使用するという。姉とは英語と日本語の両方を使うと言っている。両親同士は日本語である。日本語も英語もアイデンティティを表す言語としている。

インフォーマントの家族間の使用言語は複雑である。インフォーマントKとMの家庭では日本語のみを、Sの家庭では英語のみを使用しているが、K、M、S以外の家庭では二つあるいは三つの言語が使用されている。複数言語が使用される場合、同じ二人の間で使用される言語が単一ではなく、複数であるものが見られる。複数使用が見られるのはインフォーマントCとその妹、Yとその弟、Fとその家族構成員、Eとその父、Eとその弟、Lとその弟、Hとその妹、Hの両親、Tとその父、Tとその姉の間である。姉弟であるインフォーマントEとTの父親との使用言語を比較すると、Eは父親と英語と日本語としているが、Tは父親へは日本語であり、父親はTへ日本語と英語を使用するという、姉と弟で異なる状況が見られる。また、インフォーマントEとTの家族間使用言語を見ると、日本人（日本国籍）の親とその子供であっても、親子間の会話が日本語でなされるとは限らないことがわかる。インフォーマントFの家族間使用言語を見ると、Fも両親も中国人だが、親子間、夫婦同士で日本語も使用することがわかる。家族構成員の国籍が表す国で最も使用される言語と、実際、家庭内で使用する言語が必ずしも一致しないことがわかる。

#### 4 トピックによる使用言語状況

トピックによるインフォーマントの使用言語の傾向をアンケート調査した。

日常生活に関するトピックとして、「食べ物」「お金」「時間」「交通機関」「アルバイト」「サークル」「ボーイフレンド／ガールフレンド」「学生／友達」「家族」「映画」「ファッション」「音楽」「スポーツ」「ショッピング」の14項目をあげた。日本語、あるいは主に日本語を使用するという回答の合計数は87であり、英語あるいは主に英語を使用するという回答の合計数は65であった。その他の言語として、北京語とドイツ語で話すと回答したものが4つあった。北京語とドイツ語は、いずれも回答者にとっての第一言語である（表3の\*6）。インフォーマントCは2つの項目で、Mは3つの項目で、Lは6つの項目で複数回答をしている。

大学生にとって公的な場面を多く含む大学に関するトピックとして、「授業」「先生」「大学」「学生／友達」「宿題」を、一般社会・キャリアに関するトピックとして「留学」「将来設計／就職」「政治経済」「時事問題（地球温暖化など）」の9つの項目をあげた。項目「学生／友達」は日常生活に関するトピックとしても取り上げているが、「学生／友達」は内容を細分すれば公的場面も含むと考えたからである。日本語、あるいは主に日本語を使用するという回答の合計数

は25であり、英語、あるいは主に英語を使用するという回答の合計数は65である。「アルバイト」「サークル」を公的な場面と捉えれば、日本語、あるいは主に日本語を使用するという回答の合計数は15であり、英語、あるいは主に英語を使用するという回答の合計数は4である。「アルバイト」「サークル」の合計数を合わせると日本語、あるいは主に日本語を使用するという回答の合計数は40であり、英語、あるいは主に英語を使用するという回答の合計数は69である。その他の言語として北京語とスペイン語で話すという回答したものが3つあった(表3の\*7)。スペイン語と回答したものは英語との複数回答である。インフォーマントLは6つの項目で日本語英語の複数回答である。

下の表3にインフォーマントの第一言語とトピックによる主な使用言語をまとめた。日常生活に関するトピックでは主な使用する言語は第一言語と殆ど一致するのがわかる。公・一般社会・キャリアに関するトピックでは主として英語を使用する傾向が見られることがわかる。

表3 インフォーマントの第一言語とトピックによる主な使用言語

インフォーマント	C	S	Y	F	E
第一言語	日/ド	英	英	北	英
日常生活に関するトピック	日(*6)	英	英	日(*6)	英
公・一般社会・キャリアに関するトピック	英	英	英	日/北(*7)	英/ス(*7)
インフォーマント	K	M	L	H	T
第一言語	日	英	日	日	英
日常生活に関するトピック	日	英	日	日	英
公・一般社会・キャリアに関するトピック	日	英	英/日	英	英

日：日本語 英：英語 ド：ドイツ語 北：北京語 ス：スペイン語

トピックによる使用言語のアンケートとインタビューの中で、インフォーマントCは「答えるのが難しい」と述べ、Fは「使用言語はトピックより話し相手によって決まる」とコメントしている。インフォーマントF、M、C、Eは複数回答をしている。これらから、トピックだけで全ての使用言語が決定されるのではないことがわかる。5では話し相手によってどちらの言語を使う傾向があるのかを考察していく。

## 5 話し相手による使用言語状況

家族間での使用言語状況は2で述べた。ここでは家族外の人との使用言語状況とインフォーマント同士での使用言語状況をアンケート、インタビューによる調査と会話記録の分析を用いて考察する。

### 5. 1 家族外での使用言語状況

話し相手が大学の先生、職員、同学部の学生、他学部の学生、サークルの友達、アルバイト先の人、近所の人と話すときのお互いの使用言語を調査し、その結果を表4にまとめた。人数には複数回答を含んでいる。

表4 話し相手による使用言語（単位：人）

問柄	相手の使用言語			インフォーマントの使用言語		
	日本語	英語	その他	日本語	英語	その他
大学の先生	6	10	0	5	10	0
大学の職員	9	3	0	9	3	0
同学部の学生	7	9	混ぜ言葉1 ／北京語1	7	9	混ぜ言葉1 ／北京語1
他学部の学生	9	1	0	9	1	0
サークルの友達	6	1	0	6	1	0
アルバイト先の人	6	3	ドイツ語1	6	3	ドイツ語1
近所の人	7	3	北京語1	7	3	北京語1

大学の先生との会話では、先生の使用言語は英語が10人、日本語が6人であり、インフォーマントの使用言語は英語が10人、日本語が5人であり、両方で英語のほうが多い。先生側と学生側（インフォーマント）の数字の不一致は授業が講義ものか演習ものかによって生じるものと推測する。多くが英語での授業だが、日本語で行われる授業や他学部の学生も一緒に履修するオープン科目になると日本語であるため、授業で決められた使用言語によって先生との使用言語がおのずと決まってくるからであろう。

同学部の学生とは、お互いにやや英語のほうが多いものの、日本語と英語の両言語が使われている。インフォーマントLは「混ぜ言葉」を使うと答えている。インフォーマントFは北京語も含めているが、これは中国からの留学生と使用するものである。

大学の職員、他学部の学生、サークルの友達、アルバイト先の人、近所の人とはお互いに日本語を使用する傾向が強いが、英語、あるいは北京語、ドイツ語も使用されている。所属する学部内にとどまらず、バイリンガルの存在を知ることができる。

授業のように使用言語が規制されている場合、決められた言語にするのは当然である。しかし、話し相手もバイリンガルで、使用言語が規制されていない場合、お互いに同じ言語にすることもあれば、インフォーマントの中には異なる言語で話すこともあるようである。モノリンガルの相手にはバイリンガルであるインフォーマントがモノリンガルの使用言語に合わせており、コンバージェンスのアコモデーション<sup>(19)</sup>を行っていることがわかる。インフォーマントL

以外は、CSをすると自己申告していないが、CSをしていることは大いに考えられる。アンケートとインタビューの中で、「日本語と英語を少し」などの回答が見られるが、それらが一つの会話の中であるのか、一つの会話を一つの言語で完結しているのか明確な回答は得られなかった。

## 5. 2 インフォーマント同士の使用言語状況

5. 1の「同学部の学生との使用言語」からインフォーマント同士が日本語と英語の両方を使用することがわかったが、5. 2では会話記録の分析によって、インフォーマント同士の使用言語を詳細に検討する。

Nishimura<sup>(20)</sup>によると、日本語英語バイリンガルである日系二世の会話は会話参加者によって言語の使用が異なり、それは三つに分けられるという。① The basically Japanese variety ② The basically English variety ③ The mixed varietyの三つである。The basically Japanese varietyは基盤言語を日本語とし、その中に英語のCSが見られるもので、二世が二世ではない日本人と話すとき、このバラエティになる。(以降The basically Japanese varietyをBJVと記す。) The basically English varietyは基盤言語を英語とし、その中に日本語のCSが見られるもので、二世同士が話すとき、このバラエティになる。(以降The basically English varietyをBEVと記す。) The mixed varietyは日本語と英語が両方使われ、どちらが基盤言語となっているかわからないもので、聞き手に二世とそうでない日本人がいるとき、このバラエティになる。(以降The mixed varietyをMVと記す。)

インフォーマントの会話を概観すると、BJV、BEV、MVのいずれもある。表5に会話1から会話12における会話バラエティの割合を示した。数字は各バラエティのターン数が会話全体のターン数に占めるパーセンテージである。

表5 各会話におけるバラエティの割合

会話参加者	会話1	会話2	会話3	会話4	会話5	会話6
		F、K	E、K	L、F、C	L、F、C、M	F、C
BEV	100.0%	100.0%	0.0%	7.9%	0.0%	2.4%
BJV	0.0%	0.0%	100.0%	53.1%	100.0%	70.2%
MV	0.0%	0.0%	0.0%	39.0%	0.0%	27.4%
会話参加者	会話7	会話8	会話9	会話10	会話11	会話12
	Y、S	Y、S、M	E、T、C	C、Y	M、T	E、C
BEV	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	84.5%	40.8%
BJV	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8.6%	0.0%
MV	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	6.9%	59.2%

会話1、2、7、8、9は会話全体を通してBEVであり、会話3、5は会話全体を通してBJVである。会話4、6、11、12は会話の途中でバラエティが移り変わり、バラエティの量は

会話によって異なっていることがわかる。

インフォーマントK、E、T、Sに共通しているのは、英語圏である米国生まれであり、米国の公教育を受けて成長したことである。インフォーマントK、E、T、Sが会話参加者に含まれていると、BJVは殆どないということである。BJVがみられるのは会話11のわずか8.6%である。反対にBEV100%のものには会話参加者に必ずK、E、T、Sが含まれている。(会話1、2、7、8、9参照)

インフォーマントK、E、T、S以外のインフォーマントが参加している会話のバラエティを見ると、BJV、BEV、MVの全てが見られる。インフォーマントCが参加している会話12と会話4を取り上げて、会話バラエティ、会話参加者、トピックを検討してみる。会話12の参加者はCとEであり、BEV40.8%とMV59.2%である。会話12のBEVにおけるトピックは料理と弟、学部と専門性、留学、ニューヨーク（インフォーマントEの家があるところ）である。勉学に関する内容とインフォーマントEがE自身のことを語る場面が多い。インフォーマントEは自身について語るときは、Eにとっての第一言語である英語を基盤言語とするBEVになる傾向があり、EもCも勉学に関する内容はBEVになる傾向がある。会話12のMVでのトピックは弟妹、大学志望動機、お菓子、大学の留学センター、通貨、夏休みの予定、インドでのボランティア活動等、現在の生活に密接していることである。会話4の会話参加者はL、F、C、Mであり、BJV、BEV、MVのいずれもがみられるが、BEVはわずか7.9%である。会話4のBEV（7.9%）はインフォーマントLとMが自身のクリスマスと誕生日の祝い方、クリスマスプレゼントを語る部分である。インフォーマントMにとっては第一言語が英語であり、M自身のことを話すときは、第一言語を基盤言語とするBEVになる傾向がある。会話4のBJVにおけるトピックはアルバイト、兄弟、食べ物、電化製品の保証書、冬休みの予定であり、身近で日本に関わる内容である。会話4のMVでは大学の先生（英語圏出身）のこと、アメリカの食べ物、国によるクリスマスプレゼントの違いである。日本から離れて、英語圏、ドイツ語圏に関わる内容である。トピックと会話バラエティの関わりを見てみると、日常的な話題、日本に関わることはBJVで話し、科学的なこと、海外や英語圏に関わることになるとBEV、MVになる傾向がある。自身のことを語る部分になると、自身の第一言語を基盤言語にする傾向があることもわかった。

## 6 おわりに

日本語英語バイリンガル大学生は多言語に接触する環境で成長し、現在も多言語に接触する環境にある。しかし、その言語習得の環境は、多言語使用の家庭、多言語使用社会、学習機関における外国語教育授業など多様である。日本語英語バイリンガル大学生は、日常生活に関するトピックでは第一言語を使用する傾向が非常に強く、公・社会・キャリアに関するトピックでは英語使用の傾向がみられる。日本語英語バイリンガル大学生の多くの家庭では、複数の言語を使用し、互いが異なる複数の言語を使用することがわかった。日本語英語バイリンガル大

学生はモノリンガルとの会話ではモノリンガルの使用言語にコンバージェンスし、言語使用に規制がある領域ではそれに従う。しかし、日本語英語バイリンガル大学生同士のインフォーマルな会話においては、単一の言語を使用することもあるが、一つの会話の中で日本語英語の両言語を使用すること、すなわちCSがみられる。会話バラエティは話し手の背景に影響され、その時点でのトピックによって変化することもある。以上から、バイリンガルたちは一つの会話において常に一言語を選択するとは言えず、会話参加者、トピック、場面に応じて巧みに言語を切り替え、かつ互いに異なる言語を使用する場合もあることが明らかになった。CSの機能的分析は次回に譲る。

### 【註】

- (1) ICUと上智大学の国際教養学部（2006年までは比較文化学部）は以前から知られているが、1982年には新潟県に国際大学が開校、2000年には大分県に立命館アジア太平洋大学が開校、2004年には早稲田大学が国際教養学部を開設、2008年には法政大学にグローバル教養学部が開設されている。1992年設立の宮崎国際大学（宮崎県）は全ての授業が英語で行われている。（朝日新聞2007年7月9日）
- (2) 国籍留保とは外国で生まれた日本国民で、かつ、出生により外国国籍も取得したものは重国籍者となるが、日本国籍を失わないようにするために出生から3ヶ月以内に届け出ること。
- (3) 子女数とは日本国籍を持つ小・中学校就学年齢の子供の数。
- (4) 山本雅代『バイリンガル—その実像と問題点』大修館、1991年、p.8。
- (5) Leonard Bloomfield, *Language*, New York: Rinehart and Winston, 1933, p.56.
- (6) Hugo Baetens Beardsmore, *Bilingualism: Basic Principles*, Clevedon: Tieto Ltd, 1982, p.6.からHaugen (1953, p.7) を引用。
- (7) 前掲 (4)、p.7。
- (8) Raymond G. Jr. Gordon ed., *Ethnologue: Languages of the World*, Dallas: SIL International, Online version <http://www.ethnologue.com/>. 人数には第二言語として使用する人の数も計上されている。
- (9) 小林素文『様々な英語』研究社、1988年、p.70。
- (10) テレビ番組の街頭インタビューでもインタビューに答えた人の発話には助詞の文法的誤り等は頻繁にみられる。しかし、テロップには誤りは訂正されている。
- (11) Rene Appel and Pieter Muysken, *Language contact and bilingualism*, London: Edward Arnold, 1987.
- (12) 前掲 (4)。
- (13) 岡秀夫 「外国語能力を探る」『東京大学英語教育学会紀要』vol.1、1997年。
- (14) 岡秀夫 「コード・スイッチングをめぐる諸問題」『松村幹男先生退官記念英語教育学研究』溪水社、1995年。
- (15) Kite, Y. *Japanese/English codeswitching: The structure of codeswitching as an unmarked choice and its relation to language proficiency*, Michigan: UMI dissertation services, A Bell and Howell Company, 1996.
- (16) エリクソンはアイデンティティを、一貫性を持った〈わたし〉と他社（集団）とのズレの感覚だと言っている。西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993年。
- (17) 国際的に、対外的には北京語がアイデンティティを表す言語であろうが、北京語を話す中国人

留学生が身近にいる環境にあつては、より深い感情を表すことのできる広東語がアイデンティティを表す言語であると申告したと思われる。

- (18) インフォーマント自らアンケートの回答に「混ぜ言葉」と記入した。インタビューで確認したところ、別名「ちゃんぽん」とも言い、日本語と英語をひとつの会話の中で混ぜて使うことであり、「混ぜ言葉」と言う語は兄弟友人の中で知られていると説明してくれた。すなわち「混ぜ言葉」「ちゃんぽん」はコードスイッチングである。
- (19) アコモデーションとは調節することである。スピーチ・アコモデーション理論では話し手は相手に受けいれられるために相手の話し方に近づけるが、その近づけることをコンバージェンスと言う。反対に相手の話し方から離れていくことはダイバージェンスと言う。Howard Giles, Nikolas Coupland, and Justine Coupland “*Accommodation theory: Communication, Context, and consequence*” in *Context of Accommodation*, New York: Cambridge University Press, 1991. 東昭二『社会言語学入門』研究社、1997年。
- (20) Miwa Nishimura, *Japanese/English code-switching: syntax and pragmatics*, New York: Peter Lang Publishing, 1997, p.59-71.

#### 【付記】

本稿は平成20年度目白大学大学院国際交流研究科言語文化交流専攻修士論文『日本語英語バイリンガル大学生によるコードスイッチングの一考察—機能を中心に—』の1章、2章に加筆補正したものです。